

博士論文要旨

論文題名：近現代「沖縄」文学研究 ——ジェンダー・暴力批判・戦争記憶継承

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
クリヤマ ユウスケ
栗山 雄佑

本論文は、近現代「沖縄」文学とされるジャンルに文学作品、作家について、ジェンダー、暴力批判、沖縄戦の記憶継承の3点に焦点を合わせて論じるものである。特に、1995年9月4日に発生した米軍兵士による少女暴行事件とその後の沖縄県に関する情勢を反映した作品がもたらした影響に着目し、ここで立ち上げられた言説の有用性を再検討することを目指す。

この問題に関して、本論文は3部構成にて論述を行う。第1部では、目取真俊が1999年に発表した掌編小説「希望」に内包された問題を中心に論じていく。「希望」は、1995年9月の事件を基に、事件への抗議の意を表明する手段として、これまで想起されなかった「最低の方法」としての米軍兵士の子どもを略取し殺害することを想起したものである。この「希望」、さらには「希望」と同様の問題を取り上げた「虹の鳥」、沖縄における天皇制問題、皇族へのテロルへと問題が焦点化している「平和通りと名付けられた街を歩いて」を取り上げることで、対抗暴力の有用性のみならず焦点が当てられた各作品に内包された、基地問題、天皇制問題といった大きな事象で後景化された個人の被傷の問題を指摘する。

第2部では、目取真と1995年9月の問題を考えるにあたって、1995年に至るまでの沖縄における様々な暴力の潜在を描いた又吉栄喜の2つの作品と、目取真の「水滴」を論じる。第4章の「ギンネム屋敷」、第5章の「ジョージが射殺した猪」は、それぞれ戦後の沖縄と朝鮮人の関係性、ベトナム戦争時の米軍兵士の想起から、「朝鮮人」、「米軍兵士」といったカテゴライズがもたらす暴力性を浮き彫りにする作品である。この又吉の両作品が提起した問題を基盤に、沖縄戦から「50年」に突然右足が水で膨れ上がり、その水を夜な夜な兵士の亡霊が飲みに来る、といった内容を持つ目取真の「水滴」が描き出そうとした、「話すことはない」沖縄戦の記憶をいかに語ることが出来るのか、を考える。

第3部では、戦時から現代に至る様々な暴力の記憶と出会った者がいかなる変容を遂げ、沖縄という空間を生きることが出来るのか、を提起する作品を論じる。第7章の「群蝶の

木」、第 8 章では崎山多美の「月や、あらん」では、これまで聞き漏らされてきた従軍慰安婦の記憶、証言がいかに関き手を変容せしめるのか、その変化が今後の沖縄戦の記憶継承にもたらす影響とは何か、を考える。その上で、第 9 章では目取真俊の「眼の奥の森」について、「希望」から連続する対抗暴力の問題を批判しつつ、性暴力の記憶を自らの立場から考えようとする少女の姿を通じて、非暴力的な暴力の抵抗の可能性を探る。

以上を通じて、沖縄の文学、とりわけ目取真俊の文学を論じる上で常套句のように使われる〈沖縄の怒り〉なる言説の問題点とともに、見過ごされてきた登場人物の〈声〉を感知し聞き受けるための方策を提起した。それは、各作品においてこれまでの先行論が設定しがちであった〈加害—被害〉といった二分法を相対化し、その中から多様な〈声〉を内包した「沖縄」文学が、いかに沖縄に関する状況を描出し、閉塞する現状を超克するための提起を行おうとするのかを明らかにするものである。